

0. はじめに

この小論では英語の定名詞句の照応について、名詞句の線的順序の問題を中心に考察する。第1節では、線的順序が指示の決定に関与しているとするLangacker(1969)と関与しないとするReinhart(1976, 1983)の分析を概観する。第2節では、Reinhart(1976, 1983)で問題となる、線的順序が関与していると考えられる3つの場合を取りあげる。第3節では、「語順は構造的階層性を反映する」とする最近の生成統語論(Larson 1990, Kayne 1993)によって、線的順序の問題を階層的に説明することが可能であることを述べる。*

1. 線的順序は必要か

1.1 先行かつ統御 (Langacker 1969)

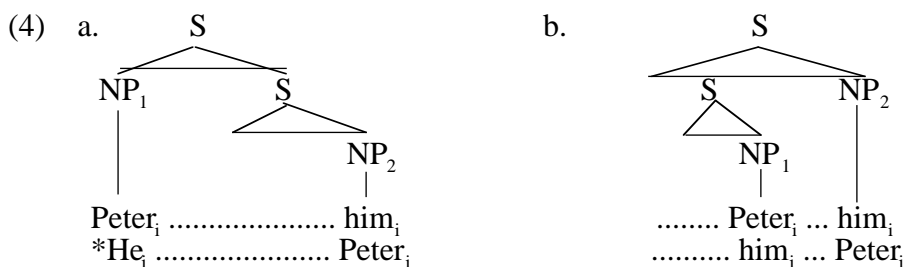
Langacker(1969)は2つの‘primacy’ (卓越) の関係として、次のように先行と統御を仮定した。

- (1) two ‘primacy’ relations
 - a. precede
 - b. command: a node A “commands” another node B if (1) neither A nor B dominates the other; and (2) the S-node that most immediately dominates A also dominates B. (Langacker 1969: 167)

そして、「代名詞は先行詞を先行かつ統御してはならない」という条件で次の例を説明した。¹

- (2) a. [Peter_i hates the woman [who rejected him_i]]
- b. *[He_i hates the woman [who rejected Peter_i]]
- (3) a. [The woman [who rejected Peter_i] is hated by him_i]
- b. [The woman [who rejected him_i] is hated by Peter_i] (Langacker 1969: 169)

(2)と(3)の構造はそれぞれ次の(4a)と(4b)である。



(4a)ではNP₁がNP₂に先行し、かつ統御するため、(2b)で同一指示の解釈ができないことが正しく説明される。これに対し(4b)ではNP₁がNP₂に先行しているが統御はしないため(3b)も同一指示が可能と正しく予測される。(2a)と(3a)は先行詞が代名詞に先行しているので同一指示は可能であり、これも予測通りとなる。

以上のようなLangacker(1969)の説明は条件の中に先行性という名詞句の線的順序を含んでおり、照応現象に線的順序が関与しているとするものである。

1.2 構成素統御領域 (Reinhart 1976, 1983)

これに対しReinhart(1976, 1983)は、階層性に基づく領域によってのみ指示は決定され、線的順序は関与しないと考えた。Reinhartがその証拠としている主な例は次の(5)と(6)である。²

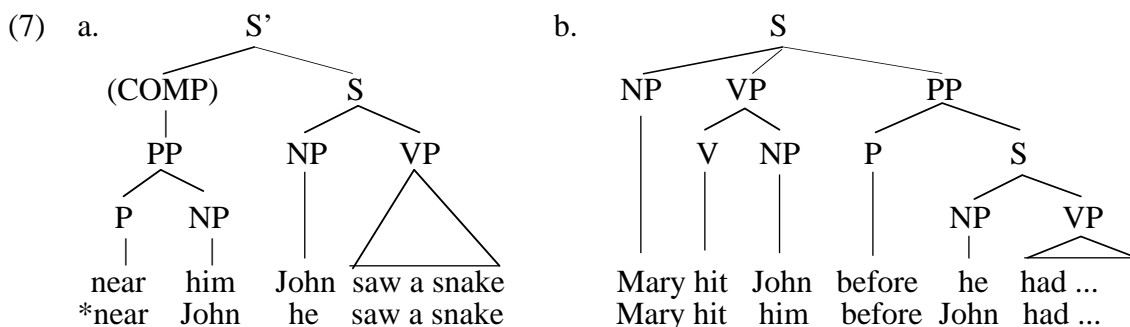
- (5) a. Near him_j, John_i saw a snake.

b. *Near John_i, he_i saw a snake. (Lakoff 1976: 278)

(6) a. [Mary hit John_i [before he_i had a chance to get up]]

b. [Mary hit him_i [before John_i had a chance to get up]] (Lakoff 1976: 282)

(5)と(6)の構造はそれぞれ次の(7a)と(7b)である。



(5a)と(6b)ではhimがJohnに先行し、かつ統御しているので、Langacker(1969)の説明では誤って同一指示不可能と予測してしまう。また(5b)ではheがJohnに先行していないので統御しているかどうかにかかわらず同一指示可能と予測するがこれも誤りとなってしまう。このようにこれらの例は線的順序を含めたLangacker(1969)の説明の反例となる。

これに対してReinhart(1976, 1983)は構成素統御(c-command)に基づく領域を定めることで、上の事実も説明することができると主張する。c-commandの定義は次である。

(8) Node A c(onstituent)-commands node B iff the branching node a_1 most immediately dominating A either dominates B or is immediately dominated by a node a_2 which dominates B, and a_2 is of the same category type as a_1 .

(Reinhart 1976: 148, 1983: 17)

またこれをもとにした非同指規則は次である。

(9) A given NP must be interpreted as non-coreferential with any distinct non-pronoun in its c-command domain. (Reinhart 1983: 43)

これらの定義に従えば、(5a)、(6a)、(6b)ではhimやheがJohnをc-commandしないので同一指示が可能であり、(5b)ではheがJohnをc-commandするので同一指示は不可能と正しく説明できる。また上で見た(2)と(3)の例においても、同様にheまたはhimがPeterをc-commandするのは(2b)だけであり、(2b)のみ同一指示解釈が不可能と正しく予測できる。

このようにReinhart(1976, 1983)はc-command領域が名詞句照応を決定する要因であり、線的順序は文法には関与しないと主張する。また、この考え方はChomsky(1981)などの束縛理論にも受け継がれている。

以上この節では、名詞句の照応現象に線的順序を要因として認めるLangacker(1969)と線的順序を文法から除外するReinhart(1976, 1983)の分析を概観した。

2. 線的順序を除外することの問題点

2.1 動詞句内の前置詞句

Reinhartの分析は、c-command領域という、心理的実在性のある概念を用いた優れたものである。しかしながら、文法から線的順序を除外することによりいくつかの問題が生じてしまう。³ まず第一に動詞句内の前置詞句の問題がある。

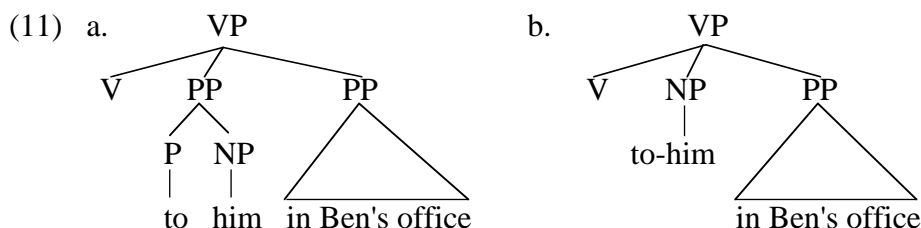
(10) a. *I spoke to him_i in Ben_i's office. (Reinhart 1976: 155, 1983: 53)

b. *I spoke with him_i about John_i's wife.

c. *I spoke about him_i with John_i's wife. (Solan 1983: 62, 67)

(10)のそれぞれの例では、下の(11a)に示すように、NP him_iはPPによって直接支配さ

れているため、BenあるいはJohnをc-commandせず、同一指示可能と予測してしまう。そこでReinhart(1976, 1983)は下の(11b)に示すように(10a)の間接目的語はPPでなく、格標識のtoがついたNPであると仮定する案を検討している。(11b)ではhimがBenをc-commandすることになるので、(10a)が同一指示不可能であることを正しく予測できる。



しかしこの解決法には問題がある。まず上の(10b)(10c)でも同一指示が不可能だということを説明するためにはtoだけでなく、withやaboutも格標識とし、[with him]や[about him]もPPでなくNPだとしなければならない。これは直感的に受け入れがたい仮定である。

また、もしその仮定をとったとしても、次の例では問題が生じる。

(12) a. *I spoke with him_i about John_i's wife.

b. I spoke about John_i's wife with him_i.

(13) a. *I spoke about him_i with John_i's wife.

b. I spoke with John_i's wife about him_i.

(14) a. *I heard from her_i about Cindy_i's job.

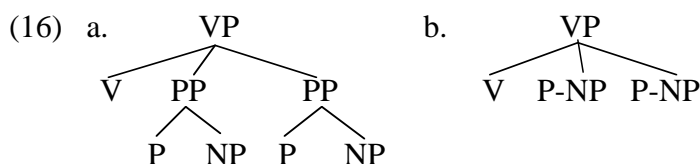
b. I heard about Cindy_i's job from her_i.

(15) a. *I heard about her_i from Cindy_i's mother.

b. I heard from Cindy_i's mother about her_i.

(Solan 1983: 62, 67, cf. 今西・浅野 1990: 76f.)

(12)から(15)の(a)は同一指示ができないので、with, about, fromを格標識と考え、これらの文に次の(16a)でなく(16b)の構造を与えることになる。



しかしながら、そうすると今度は(12)から(15)の(b)でも代名詞が先行詞をc-commandし、同一指示が不可能と誤った予測をしてしまう。

よって、前置詞を格標識とし、PP節点は存在しないとするReinhart(1976, 1983)の解決法は、概念的にも経験的にも支持できないものである。とすれば(10)と、(12)から(15)の(a)で同一指示が不可能なことを説明する必要がある。

2.2 等位構造

線的順序を除外することによる第2の問題は、次のような等位構造の場合に生じる。

(17) a. Penelope cursed Peter_i and slandered him_i.

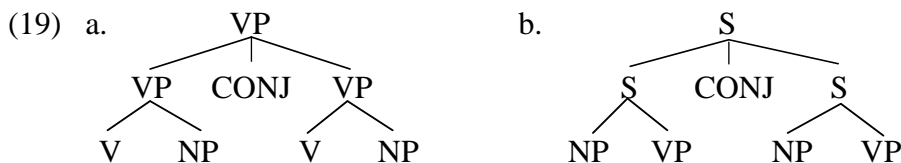
b. ?*Penelope cursed him_i and slandered Peter_i.

(18) a. Peter_i has a lot of talent and he_i should go far.

b. ?*He_i has a lot of talent and Peter_i should go far.

(Langacker 1969: 162, Hinds and Okada 1975: 331)

(17)と(18)の文にはそれぞれ次の(19a)と(19b)の等位構造が含まれている。



これらの構造では2つのNPが互いにc-commandしていない。よって(17b)と(18b)で代名詞は先行詞をc-commandせず、同一指示解釈ができないことを説明できない。

そこで、c-commandの定義を変えて、「(19)のような等位構造では、VPあるいはSがそれぞれ同じ範疇によって直接支配されているので、2つのNPはお互いにc-commandする」と考えて(17b)と(18b)を説明する可能性もある。⁴ しかしその場合は、逆に(17a)と(18a)でも代名詞が先行詞をc-commandすることになり、同一指示不可と誤って予測してしまう。これはちょうど上の2.1節で見た動詞句内の前置詞句の場合と同様である。

よって、等位構造の場合も線的順序を排除することによって問題が生じることになる。

2.3 文を超えた談話

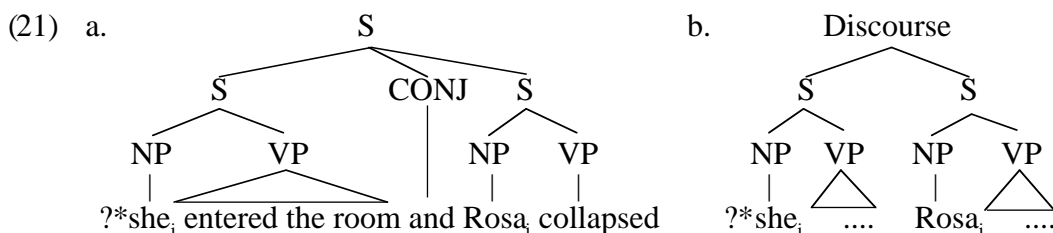
問題となる3つめの場合は、文を超えた談話(discourse)における同一指示である。

(20) a. *?*She_i entered the room and Rosa_i collapsed.*

b. *?*She_i entered the room proudly with her new hat on. A few minutes later Rosa_i collapsed.* (Reinhart 1986: 54f.)

(20a)は上で見た1つの文内の等位構造の場合であるが、(20b)は2つの文にsheとRosaが分かれている。通例生成文法では、文を超えたレベルに構造があるとは考えていないので、c-commandによる階層関係で(20b)が容認不可能であることを説明することはできない。そこでReinhart (1983, 1986)は、(20b)の不適格性は文レベルの文法とは別の、談話の原理によるものだと述べている。

しかしながら(20a)と(20b)は修飾語句こそ違うものの、基本的には同じ意味内容を述べたものであり、一方を文文法で、そして他方を談話原理で扱うというのも、文法全体の簡潔性から見て妥当とは言いがたい。そこで(20b)に対しても(20a)同様の一種の等位構造を考えてみることもできる。次の(21a)は(20a)、(21b)は(20b)の構造を示している。



しかしながら(21b)のような文を超えた構造を仮定したとしても、上で見た等位構造の場合と同じ問題が出てくることは明らかである。「sheがSを超えてRosaをc-commandする」と規定して(20b)が同一指示になれないことを説明するなら、逆に次の(22)でもsheがSを超えてRosaをc-commandすることになり、同一指示不可と予測してしまうからである。

(22) *Rosa_i entered the room proudly with her new hat on. A few minutes later she_i collapsed.*

よって文を超えた談話もReinhartの分析の問題として残る。

以上この節ではReinhart(1976, 1983)の分析では、線的順序に関わる3つの場合、すなわち動詞句内の前置詞句、等位構造、談話の場合に問題が生じることを述べた。

3. 新しい階層的分析

3.1 等位構造と談話における階層性

この節では、前節で見たReinhartの分析にとって問題となる場合を、新しい階層的分析によって説明する方法について述べる。

説明の都合上、まず等位構造と談話の場合から見ていくことにする。

(23) a. John_i came in. He_i was tired.

b. *He_i came in. John_i was tired.

(24) a. John_i came in and he_i was tired.

b. *He_i came in and John_i was tired. (Larson 1990: 594)

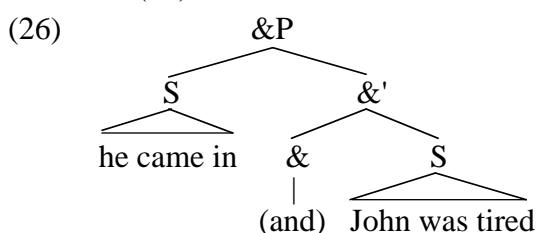
Larson (1990)は上の(23)のような談話や(24)のような等位構造における照応について次の(25)に示す仮定をしている。

(25) a. Intrasentential anaphora between elements a, b depends on the relative hierarchical relations of a, b themselves; intrasentential anaphora between a, b depends on the relative hierarchical relations of the Ss containing a, b.

b. Coordination structures fall under X-bar theory and have conjunctions as their heads.

c. In their default form, discourses are extended coordinations. (Larson 1990: 595)

すなわち、文内の照応はaとb、そしてaとbを含むSの相対的階層関係によること(25a)、等位構造もX理論に従い、接続詞をその主要部とすること(25b)、談話は無標の場合、等位構造の延長であること(25c)、である。そしてこれらに基づき、(23)と(24)の構造として(26)を示している。



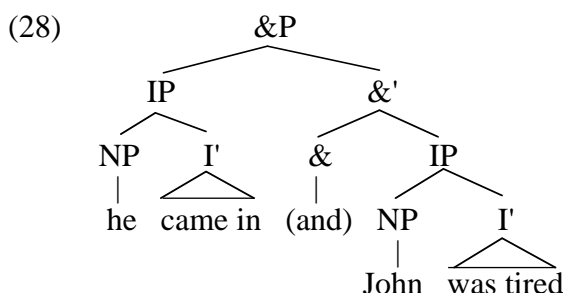
(Larson 1990: 596)

(26)では2つのSがそれぞれandを主要部(head)とする句 &Pの指定辞(specifier)と補部(complement)になっており、階層関係が生じている。そこでLarsonは次のようなc-commandによる同一指示の条件を示唆している。

(27) ... an S containing an R-expression cannot be c-commanded by an S containing a coreferential phrase. (Larson 1990: 596)

(23)と(24)の(b)では、R(eferential)表現のJohnを含むSが同一指示句heを含むSによってc-commandされているので(27)の条件の違反となる。

ここで注意したいのは、階層的な(26)においてもNP heは直接NP Johnをc-commandしてはいないことである。(26)はさらに細かく示せば(28)の構造をしているからである。



すると条件(27)は次に示すChomsky(1981)のBinding TheoryのCを拡張したものと言える。

(29) Binding Theory (C): An R-expression is free (free = not c-commanded by a co-indexed element) (Chomsky 1981: 188)

また等位構造や2文からなる談話は主要部andの投射であるとする分析は奇異に見えるかもしれないが、もとはHale(1992)で提案され、Kayne(1993, 1994)でも主張されているものである。⁵

さらに次の(b)のような意味的に等位でないandの存在もこの仮定を支持するかもしれない。

- (30) a. coordinate *and*: a knife and fork (=meal) / man and wife
 b. subordinate *and*: brandy and water / whisky and soda / bread and butter / a cup and saucer / a carriage and four / a watch and chain
 c. deletion after *and*: ham and (eggs) / coffee-and(-cake) / game and (set) (*Reader*)

(30)は『リーダーズ英和辞典』(研究社)からとったものだが、(a)の等位接続のandと比較して、(b)のandはwithで置き換えられるような従位接続的または前置詞的な働きをしている。また(c)ではandの後ろの語は省略が可能である。これらの事実はandの前後の要素が真の意味での等位でなく、階層的関係をなすとする上記の分析に合うものであろう。⁶ 同様の例としては、次のようなV (and) Vの場合がある。

- (31) a. Try and swim! (=Try to swim!)
 b. Come (and) see me again tomorrow.

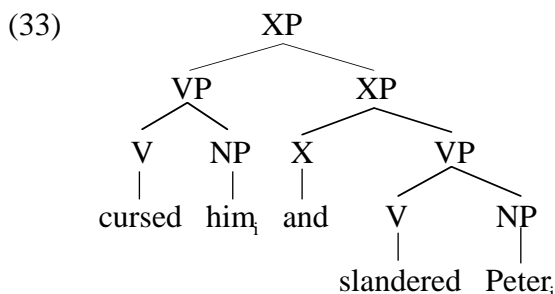
(a)の言い換えにもあるように、2つの動詞は等位でなく、andの右の要素がandの左の要素に従属していると言え、ここでの分析に合うものと考えられる。⁷

さて、上のように文と文の等位構造に階層を認めるならば、他の等位構造も同様に考えられよう。次の(32)はVPの等位構造である。

- (32) a. ?*Penelope [_{VP} cursed him_i] and [_{VP} slandered Peter_i]. (Langacker 1969: 162)
 b. *Penelope [_{VP} cursed Peter_i] and [_{VP} slandered himself_i].

(Langacker 1969: 163, n. 3)

この構造は次のようになる。

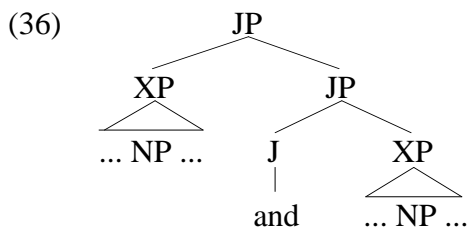


(32b)について見てみると、この文は非文であるので、左のNP Peterは右のhimselfをbindしていない、つまりc-commandしていないことがわかる。これはBinding Theory (A)の違反である。よって(32a)のhimもPeterをc-commandしてはいないことになるが、(32a)は容認可能ではない。するとここでも上の(27)で見たようなBinding Theory (C)を拡張した制約が必要となる。NPやPPの等位構造も同様である。

- (34) a. John washes the dishes in [_{NP} Mary_i's office] and [_{NP} her_i house].
 b. *John washes the dishes in [_{NP} her_i office] and [_{NP} Mary_i's house].

- (35) a. John washes the dishes [_{PP} in Mary_i's office] and [_{PP} in her_i house].
 b. *John washes the dishes [_{PP} in her_i office] and [_{PP} in Mary_i's house].

以上の、S(23, 24), VP(32), NP(34), PP(35)の等位構造は次のようにまとめて示すことができる。ここではandの範疇をJとして表す。

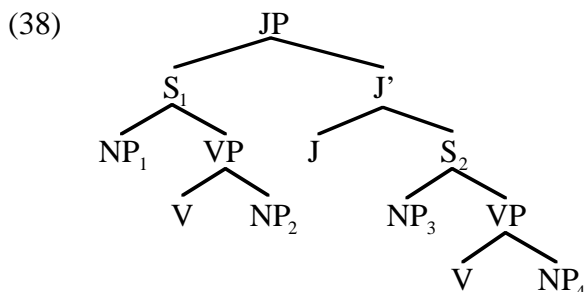


ここでは2つのXPの間に階層関係があるため、(27)をさらに一般化した(37)の条件を述べることができる。

(37) (An XP containing) an R-expression cannot be c-commanded by (an XP containing) a coreferential phrase.

これはR表現(を含むXP)が同一指示句(を含むXP)より階層的に上位になくなくてはならないということを述べたものである。(37)で括弧で示した部分を削除して読めばBinding Theory (C)となり、(37)はこれを含めた一般的な制約が同一指示解釈に働いていることを示している。

ここで次のような疑問が生じるかもしれない。(23)と(24)は主語と主語の指示関係であったが、目的語と主語の場合はどうかということである。構造で示せば次のようになる。



S₁の目的語NP₂とS₂の主語NP₃は(38)では同じ階層的高さにある。しかしそれぞれを含むS₁とS₂(=IP)は階層関係があり、S₁がS₂をc-commandするので、条件(37)によってNP₃がNP₂と同一指示のR表現である文は非文と予測される。そしてこの予測は次の(a)に示すように正しい。

- (39) a. *Mary kissed him_i and John_i loves Jane.
b. *Mary kissed him_i and Jane loves John_i.

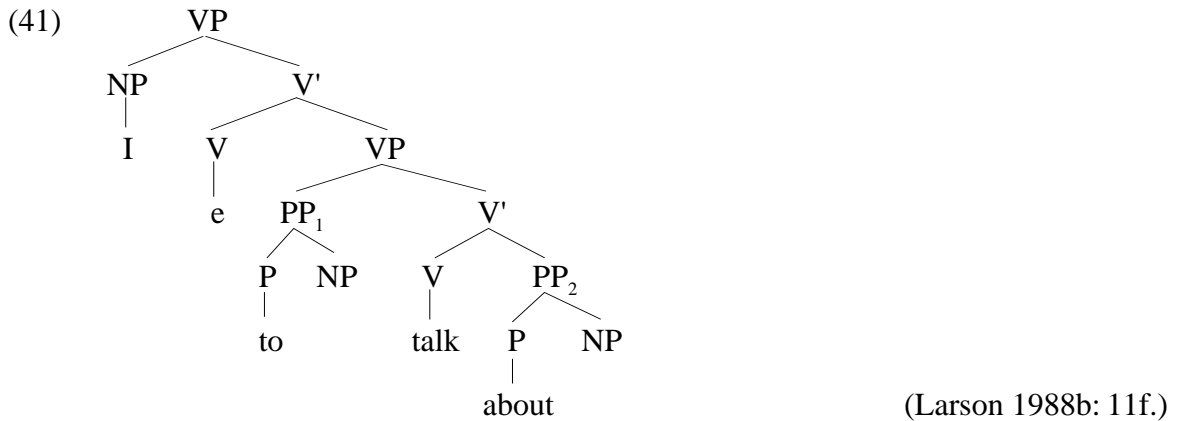
(39a)では(38)のNP₂とNP₃にあたるのがそれぞれhimとJohnであり、それぞれを含むS₁とS₂の階層関係が同一指示解釈を阻止していると考えられる。上の(39b)も同様に、NP₂のhimはNP₄のJohnをc-commandしないが、それぞれを含むS₁がS₂をc-commandするため条件(37)によって同一指示解釈ができないことが説明できる。よって(37)は一般性を持つ条件であると考えられる。

3.2 VP内の階層性

上では等位構造と2文から成る談話が実際は階層構造を成していると仮定し、階層性を用いた条件(37)によって、Reinhart(1976, 1983)の問題であったこれら2つの場合を説明した。ここでは残る1つの問題、VP内のPPの場合も新しい統語構造を仮定することにより、同様に説明できることを述べる。

Larson(1988b)はVP内のPPに対しても階層的な構造を仮定している。例えば(40)は上で見た(16a)のようなflatな構造でなく、(41)の構造をしていると考えている。

- (40) a. I talked to the men_i about each other_i.
b. *I talked to each other_i about the men_i.



(41)ではPP₁がPP₂をc-commandするが、PP₂はPP₁をc-commandしない。⁸ これは Kayne(1993, 1994)の言う非対称(asymmetrical) c-commandの関係である。

VP内のPP間にこのような関係があるならば、2.1で見た次のような例も条件(37)によって説明できる。

(10) a. *I spoke to him_i in Ben_i's office. (Reinhart 1976: 155, 1983: 53)

(12) a. *I spoke with him_i about John_i's wife.

b. I spoke about John_i's wife with him_i.

(13) a. *I spoke about him_i with John_i's wife.

b. I spoke with John_i's wife about him_i.

(14) a. *I heard from her_i about Cindy_i's job.

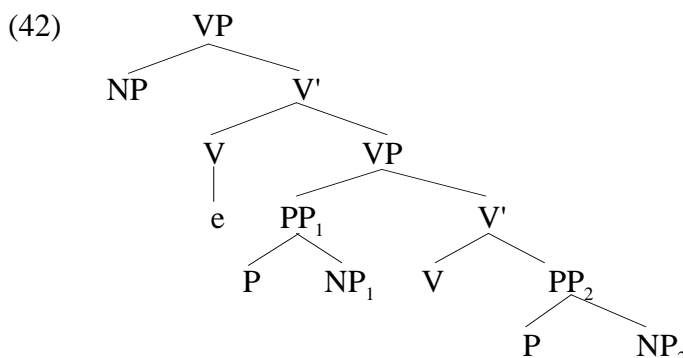
b. I heard about Cindy_i's job from her_i.

(15) a. *I heard about her_i from Cindy_i's mother.

b. I heard from Cindy_i's mother about her_i.

(Solan 1983: 62, 67, cf. 今西・浅野 1990: 76f.)

これらの例は次の構造をしていることになる。



(10)と(12)から(15)の(a)文では、R表現のNP₂を含むPP₂が同一指標のついたNP₁を含むPP₁によってc-commandされているので、(37)の違反となり、容認不可能であることが正しく説明できる。⁹ これに対し、容認可能な(12)から(15)の(b)文では、R表現のNP₁を含むPP₁は同一指標のついたNP₂を含むPP₂によってc-commandされていないため適格であると正しく予測される。

以上この節ではReinhart(1976, 1983)で問題となっていたVP内のPP、等位構造、文を越えた談話の3つの場合について、新しい統語構造と階層的条件(37)によって説明ができることを述べた。

4. まとめ

この小論では、名詞句の線的順序の問題を中心として照応現象を考えてきた。線の順序が照応に関与するとするLangacker(1969)とReinhart(1976, 1983)の分析を見たあと、広く支持されている後者の問題点について考察した。Reinhartのように文法から

線的順序を排除し、階層的条件(c-command)のみに説明を求めると、階層性がないと考えられていたVP内のPP、等位構造、文を越えた談話の3つの場合で問題が生じた。しかし最近の統語理論(Larson 1988a, b, 1990, Kayne 1993, 1994)は、線の順序は階層性を反映している、すなわち順序と構造が対応していると考えている。¹⁰ 端的に言えば、樹形図はすべて右枝分かれになっており、左の要素は右の要素より構造的に高い位置にあるということになる。また純粋な等位構造などのflatにsisterが3つ並んでいるような構造はありえないことになり、より制限された理論になっている。こうした理論が正しいとすれば、Reinhart(1976, 1983)の問題となった例も、実際はflatでなく階層的な構造をしていることになり、階層的な条件(37)によって説明できる。この条件は、R表現は同一指示の他の名詞句(例えば代名詞)より低い位置にあってはならないという直感を定式化したものと考えることができる。

* 本稿は日本英文学会北海道支部第39回大会(1994年10月2日北海道大学)シンポジウム「英語の照応現象」における口頭発表の一部に基づいている。貴重なご意見を下さった方々に感謝を申し述べたい。またインフォーマントとして協力して下さったWilliam Green氏に御礼申し上げたい。

¹ 同一指示を指標(_i)で表す。指標がついた文のアスタリスク(*)は同一指示解釈が不可能であることを示す。

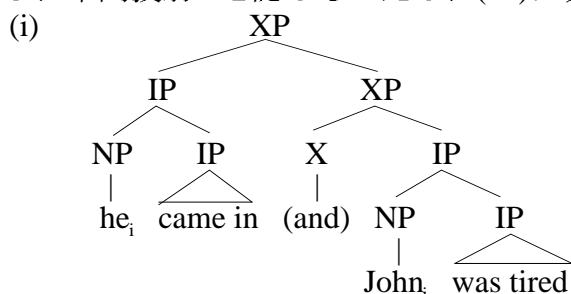
² (6b)の容認可能性については注意が必要である。Lakoff(1976)は次の例をあげて、VPが長くなれば容認性が高くなるという指摘をしている。

- (i) a. *Mary hit him_i before John_i got up.
- b. Mary hit him_i before John_i had a chance to get up. (=6b)
- (ii) a. *Mary hit him_i before John_i left.
- b. ?Mary hit him_i before John_i left in his Rolls Royce.
- c. Mary hit him_i before John_i left in his Rolls Royce for a dinner engagement at the Ritz. (Lakoff 1976: 288f.)

³ Reinhart(1976, 1983)には線の順序に関する問題とは別に島(island)の問題も存在するが、これについては別な機会に論じることにする。

⁴ このようなc-commandの定義についてはChomsky(1981: 166)を参照されたい。

⁵ Kayne(1993, 1994)は線状一致の公理(Linear Correspondence Axiom)によって、Larson(1988a, b, 1990)を理論化したものと言える。Kayneは指定辞も付加によるものとし、中間投射X'を認めないため、(28)は次の構造となる。

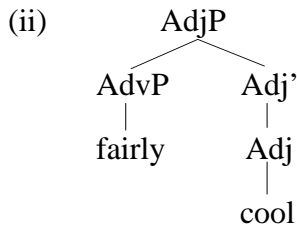


しかし、ここではこの構造でなく、従来のX'を認める枠組みで論を進めることにする。

⁶ 次のような句はandの右の要素が句の中心であるという点でここでの分析と合わないと考えられるかもしれない。

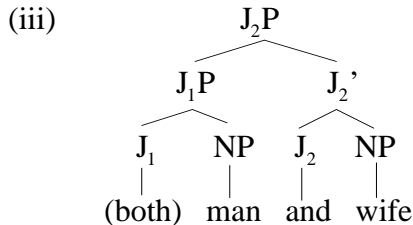
- (i) a. It's nice (and) cool. (=fairly cool)
- b. I hit him good and hard. (=very hard)

しかし括弧内に示したように、andの左の形容詞は副詞的にandの右の形容詞を修飾するので、次の構造と平行的であると言える。



(i)では副詞句が指定辞の位置にあり、その点ではandの左の句をandの指定辞とするここでの分析と一致していると考えられる。

また(30a)の真の等位構造については、ここでは深く論じないが、次のような構造を仮定したい。

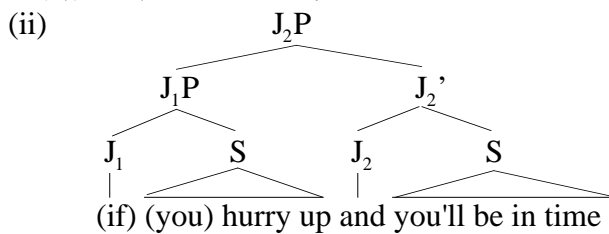


(ii)では、真の等位構造のandをboth ... and ... の相関接続詞と考えていることになる。そしてここでは2つのNPは階層的に等しい位置にあると言える。

⁷ 次のような例も注6と同じ方法で扱えると思われる。

(i) Hurry up, and you'll be in time for school.

この構造は次のように考えることができる。



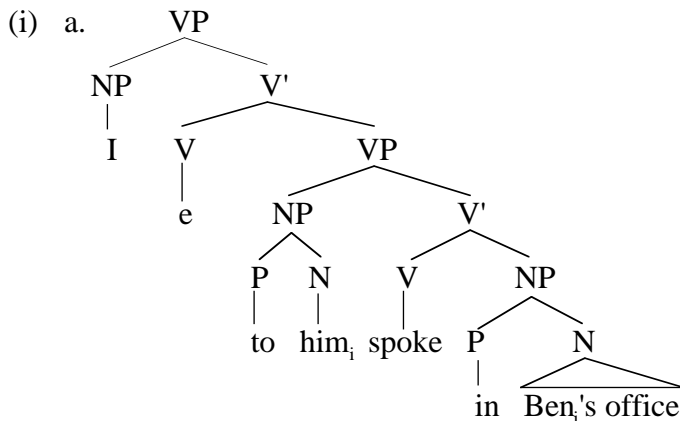
⁸ (41)はVP内主語仮説(VP internal subject hypothesis)に基づく構造であり、全体を支配する接点はVPとなっているが、このあと主語NPとVはさらに上方の位置へと移動する。Chomsky(1992)などを参照。

また厳密に言えば(40a)でもNP the menは直接each otherをc-commandしていないのでBinding Theory (A)の違反となってしまう。よってLarson(1988: 12)はNPのdomainがPPを越える可能性にふれている。しかしここでの考え方に従えば、(37)にならって、Binding Theory (A)を次のように拡張する代案も考えられる。

(i) Anaphor must be c-commanded by an (XP containing) co-indexed NP.

しかし(i)は条件としては強力すぎると思われるので、さらに具体例を広く検討する必要がある。注9を参照。

⁹ Chomsky (1994)はmergeという概念によって従来の句構造をとらえ直している。この理論では、ある要素XとYがsisterである場合、そのどちらかが投射(project)するかは基本的には自由である。もしPとNの場合に、これまでのようにPが投射してP'またはPPになるのではなく、Nが投射してN'またはNPになると仮定すればVP内にPPが2つある文、例えば(10a)は(42)の構造でなく次のような構造であることになる。



(i)でto himはhimの投射であり、NPとしてBenをc-commandしている。これが正しいければ、条件(37)で括弧で示した部分は不要になり、次のような従来のBinding Theory (C)のままでよいことになる。

(ii) An R-expression cannot be c-commanded by a coreferential phrase.

¹⁰ こうした考え方に対する反論もある。Jackendoff (1990), Ernst (1994)を参照されたい。

References

- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1992. *A Minimalist Program for Linguistic Theory*, MIT Occasional Papers in Linguistics, No. 1.
- Chomsky, Noam. 1994. *Bare Phrase Structure*, MIT Occasional Papers in Linguistics, No. 5. MIT Working Papers in Linguistics.
- Ernst, Thomas. 1994. "M-command and precedence," *Linguistic Inquiry* 25:2, 327-335.
- Hale, K. 1992. "Subject Obviation, Switch Reference, and Control," in Richard K. Larson et al. (eds.) *Control and Grammar*, Dordrecht: Kluwer, 51-77.
- Hinds, J. and N. Okada. 1975. "Backward pronominalization across coordinate structures," *Linguistic Inquiry* 6, 330-335.
- 今西典子・浅野一郎. 1990. 『照応と削除』大修館.
- Jackendoff, Ray. 1990. "On Larson's analysis of the double object construction," *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- Kayne, Richard S. 1993. "The Antisymmetry of Syntax," ms. CUNY.
- Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Lakoff, George. 1976. "Pronouns and Reference," in James D. McCawley (ed.) *Syntax and Semantics, vol. 7: Notes from the Linguistic Underground*, New York: Academic Press, 275-335.
- Langacker, Ronald W. 1969. "On Pronominalization and the Chain of Command," in D. A. Reibel and S. A. Schane (eds.) *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 160-186.
- Larson, R. K. 1988a. "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Larson, R. K. 1988b. "Light Predicate Raising," ms. MIT.
- Larson, R. K. 1990. "Double objects revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The Syntactic Domain of Anaphora*. Doctoral dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and Semantic Interpretation*. London: Croom Helm.
- Reinhart, Tanya. 1986. "Center and Periphery in the Grammar of Anaphora," in B. Lust (ed.) *Studies in the Acquisition of Anaphora*, Dordrecht: D. Reidel, 123-150.
- Solan, Lawrence. 1983. *Pronominal Reference: Child Language and the Theory of Grammar*, Dordrecht: D. Reidel.